

果樹の主要病害虫の発生状況（6月中下旬（リンゴ・モモ・ナシ・7月上旬（モモのみ））

令和7年7月3日
福島県病害虫防除所

1 果樹カメムシ類（果樹共通）

（1）フェロモントラップ調査

フェロモントラップ調査の結果、4月5半旬～6月6半旬の果樹カメムシ類の誘殺数が、相馬市2を除く8地点中、5地点（福島市大笹生、福島市飯坂町、国見町、会津坂下町、相馬市）で平年または例年より2倍以上となり、越冬世代の発生量が多い状況となっています（表1）。また、6月に入っても誘殺が増加している地点が確認されました（別紙1）。

（2）巡回調査

6月中下旬の巡回調査において、リンゴ、日本ナシ、モモとも被害果や第1世代の卵、幼虫が確認されています（図1）。なお、通常、6月下旬に被害果の調査を実施していないため、比較できる平年値はありません。

（3）防除対策

今後も、7月まで越冬世代の発生量が引き続きやや多くなると予想されます。園地をこまめに観察し、多数の飛来が見られる場合は、速やかに防除を行いましょう（令和7年6月13日付け令和7年度病害虫防除情報（果樹カメムシ類）参照）。

なお、果樹カメムシ類の隣県の発生状況については、注意報が岩手県（6月12日発表）、秋田県（6月26日発表）、宮城県（7月2日発表）で発出され、山形県においても平年より発生が多い状況です。また、山形県の予察灯調査の結果、6月4半旬は夜温が高かったため、6月4半旬に急増しています。当県においても、夜温が高い日には日没後の飛来も想定される点も注意が必要です。

また、越冬世代が多いことから、第1世代（新世代）成虫の発生量が多くなることが予想されますので、今後、注意報の発出を検討しています。

表1 フェロモントラップにおける果樹カメムシ類の誘殺数
（4月5半旬～6月5半旬）

	2025年(頭)	平年(頭)	平年比(倍)
福島市大笹生	75	30.8	<u>2.4</u>
福島市飯坂町	122	6.6	<u>18.5</u>
国見町	298	36.9	<u>8.1</u>
鏡石町	49	41.2	1.2
郡山市	16	11.7	1.4
会津坂下町	141	17.7	<u>8.0</u>
相馬市1	283	79.8	<u>3.5</u>
相馬市2	1032	—	—
いわき市	1	0.8	1.3

注1) 福島市飯坂町(過去6年)、郡山市(過去9年)、相馬市1
(過去4年)、いわき市(過去5年)は例年

注2) 相馬市1は5月5半旬以降中止
相馬市2はR6から調査開始のため平年値なし



図1 チャバネアオカメムシの幼虫と卵塊

2 リンゴの病害虫の発生状況（6月中下旬）

調査地点：中通り 22 園地、会津 12 園地

（1）リンゴ斑点落葉病

新梢葉での発生ほ場割合は、平年並の状況でした。

（2）リンゴ褐斑病

果そう葉及び新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況でした（図 2、3）。

一方、果樹研究所における子のう胞子トラップ調査の結果、6 月の飛散数は減少傾向となっています（図 4）。

7 月は本病の二次感染期です。薬剤散布は、降雨前の実施を基本とし、散布間隔があきすぎないように実施しましょう。令和 7 年 6 月 30 日付け令和 7 年度病害虫防除情報（リンゴ褐斑病）参照。

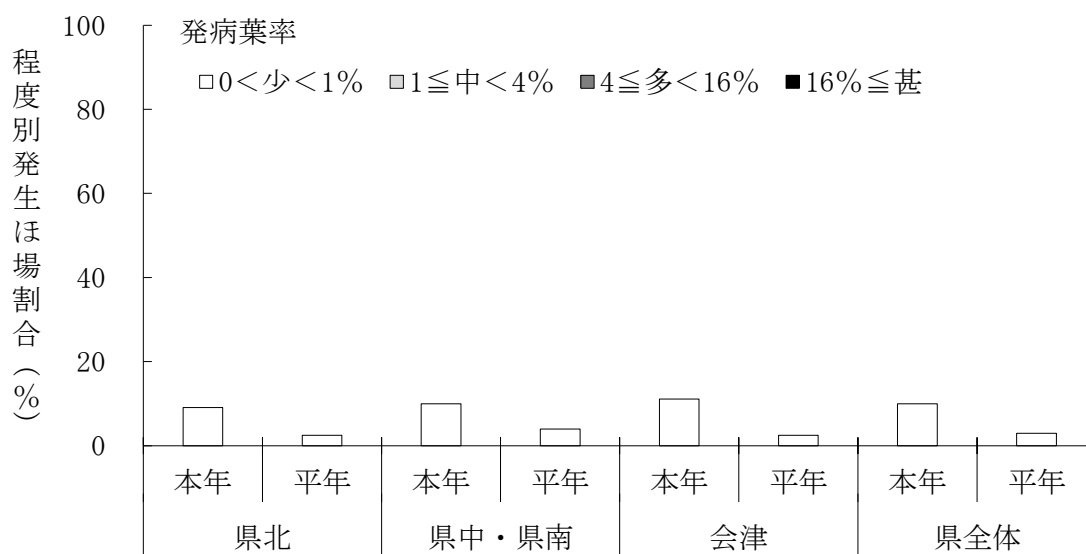


図 2 リンゴ褐斑病の果そう葉での発生状況（6月中下旬）

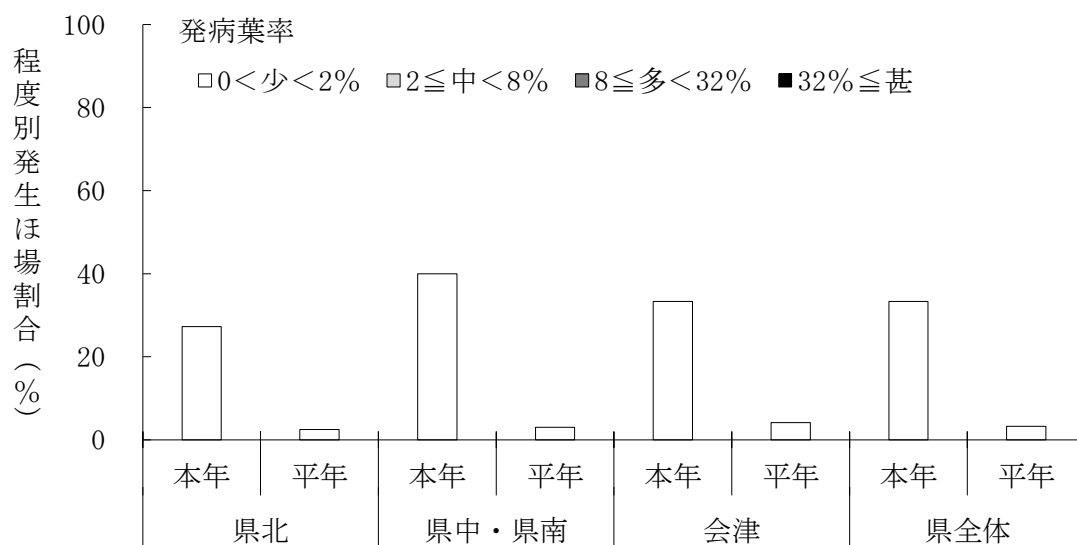


図 3 リンゴ褐斑病の新梢葉での発生状況（6月中下旬）

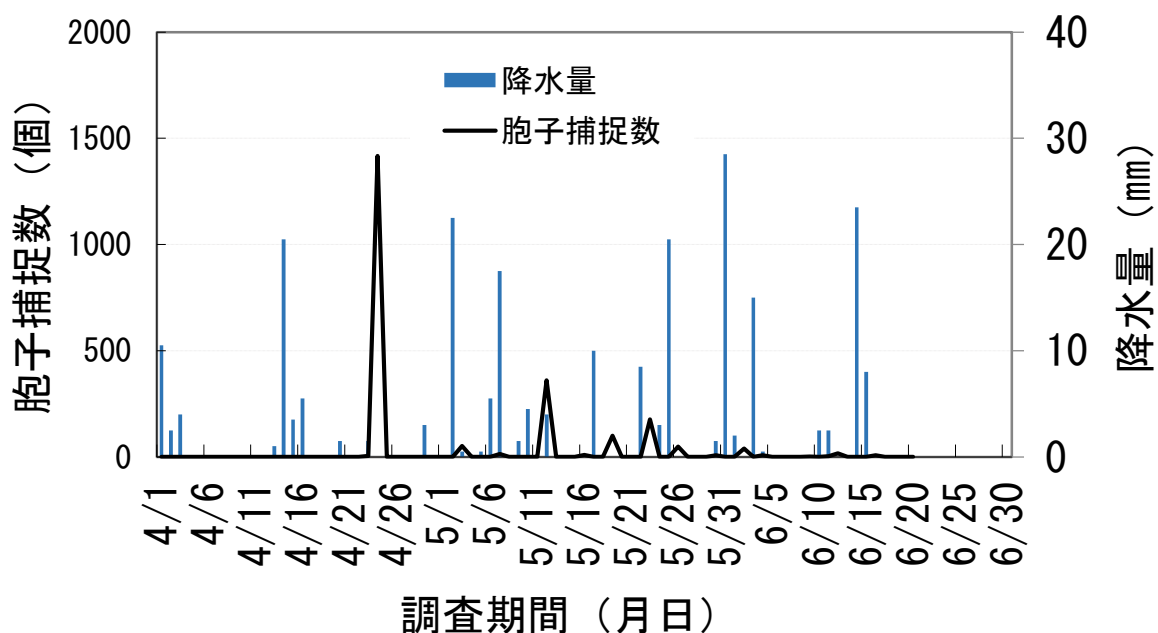


図4 リンゴ褐斑病の子のう胞子の飛散状況（6月20日現在、果樹研究所）

(3) リンゴ黒星病

新梢葉での発生は、いずれの地域も確認されませんでした（図5）。発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分しましょう。薬剤散布は散布ムラがないように丁寧に実施しましょう。

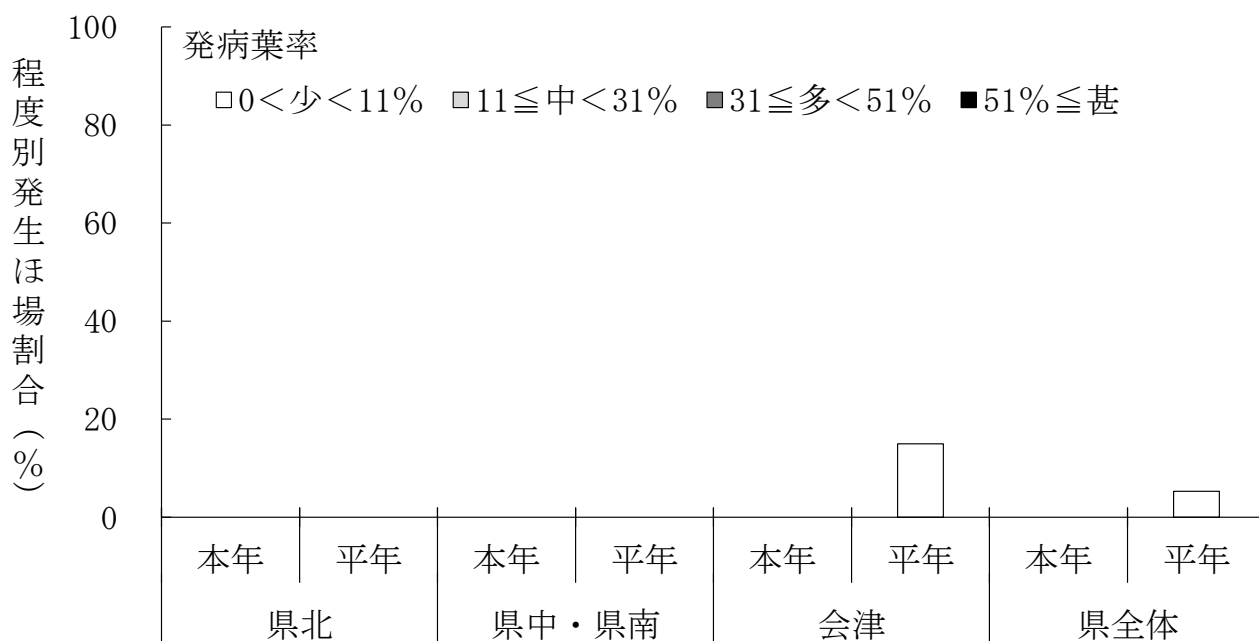


図5 リンゴ黒星病の新梢葉での発生状況（6月中下旬）

(4) キンモンホソガ

新梢葉での発生は、確認されませんでした。

(5) アブラムシ類

新梢葉での発生ほ場割合は、平年並の状況でした（図6）。

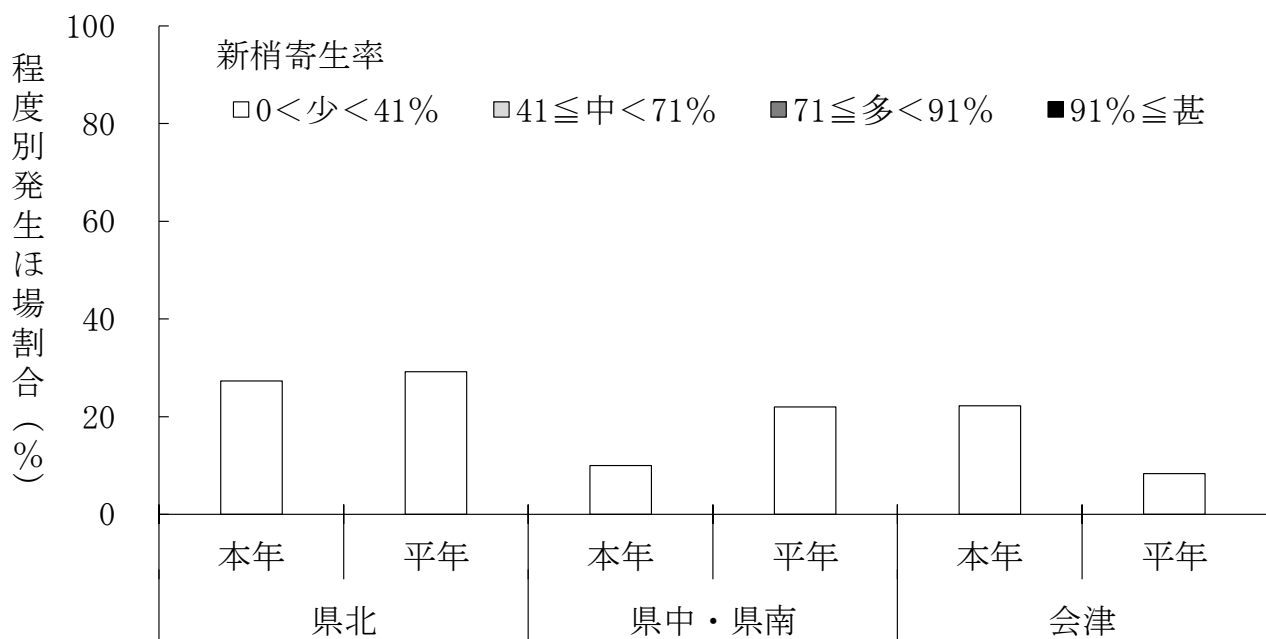


図6 アブラムシ類の新梢葉寄生状況（6月中下旬）

(6) ハダニ類

新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況でした（図7）。

要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施しましょう。

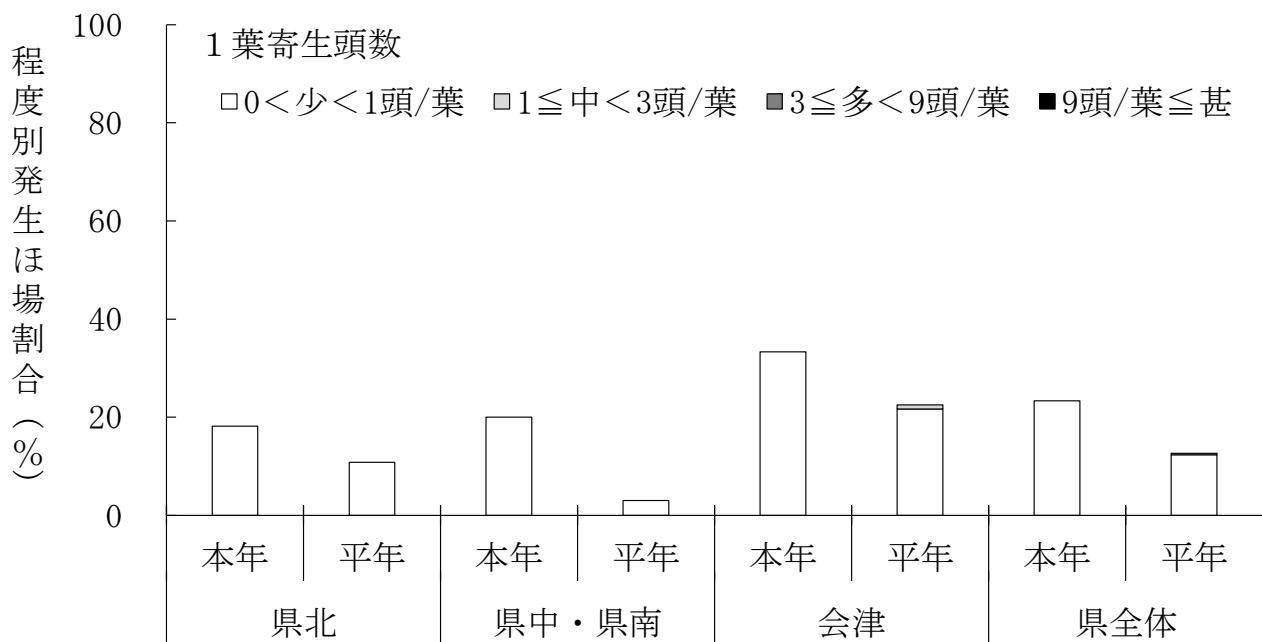


図7 ハダニ類の新梢葉寄生状況（6月中下旬）

2 モモの病害虫の発生状況(6月中旬～7月上旬) 調査地点: 福島地域9園地、伊達地域9園地

(1) 灰星病

果実での発生は確認されませんでした。収穫期の20日前頃から果実への感染がしやすい状態になるため、散布間隔をあけずに薬剤散布を実施しましょう。

(2) モモせん孔細菌病(7月上旬)

新梢葉での発生は、いずれの地点も確認されず、平年よりやや低い状況でした(図8)。また、果実発病はいずれの地点も確認されませんでした。

梅雨期は発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要です。再度園地を見回り、発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分しましょう。薬剤散布は、降雨前の実施を基本とし、散布間隔があきすぎないように実施しましょう。

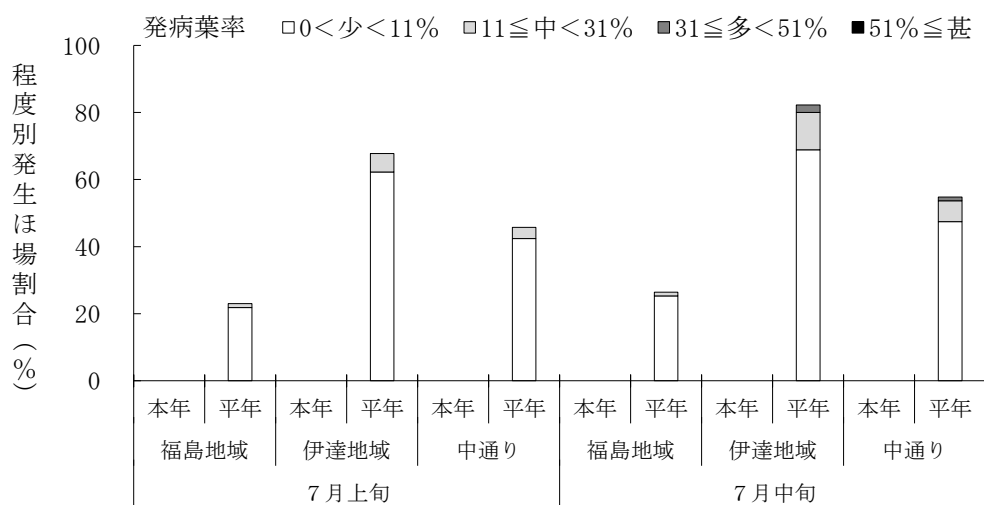


図8 モモせん孔細菌病の新梢葉での発生状況(7月上旬)

(3) シロカイガラムシ類

農業総合センター内のウメほ場におけるトラップ調査の結果、ウメシロカイガラムシ第1世代の歩行幼虫の発生は5月7日から確認され、5月中下旬がピークと判断されました(図9、※昨年のピークは5月6～14日)。

本年の第2世代幼虫は、平年で7月下旬から8月中旬になりますが、この時期はモモの収穫期であるので、防除を行う際は、薬剤の選択(収穫前日数)に注意しましょう。

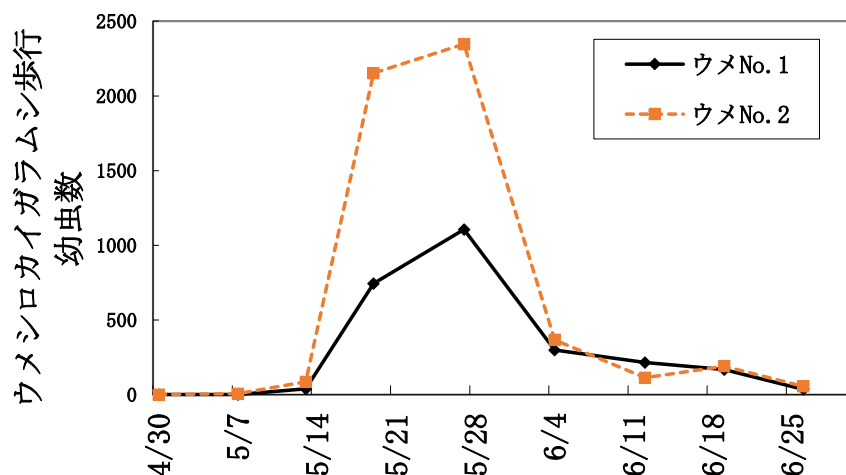


図9 ウメシロカイガラムシ歩行幼虫の発生状況(6月26日現在、農業総合センター)

(4) アブラムシ類(6月中旬)

新梢葉での発生は、確認されませんでした。

(5) モモハモグリガ(6月中旬)

新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高くなりましたが、被害程度は高くなっておらず、前回調査より発生ほ場割合も低下していました(図10)。

発生が多いほ場では、農作物病害虫防除指針や地域の防除暦を参考に防除を徹底しましょう。本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。

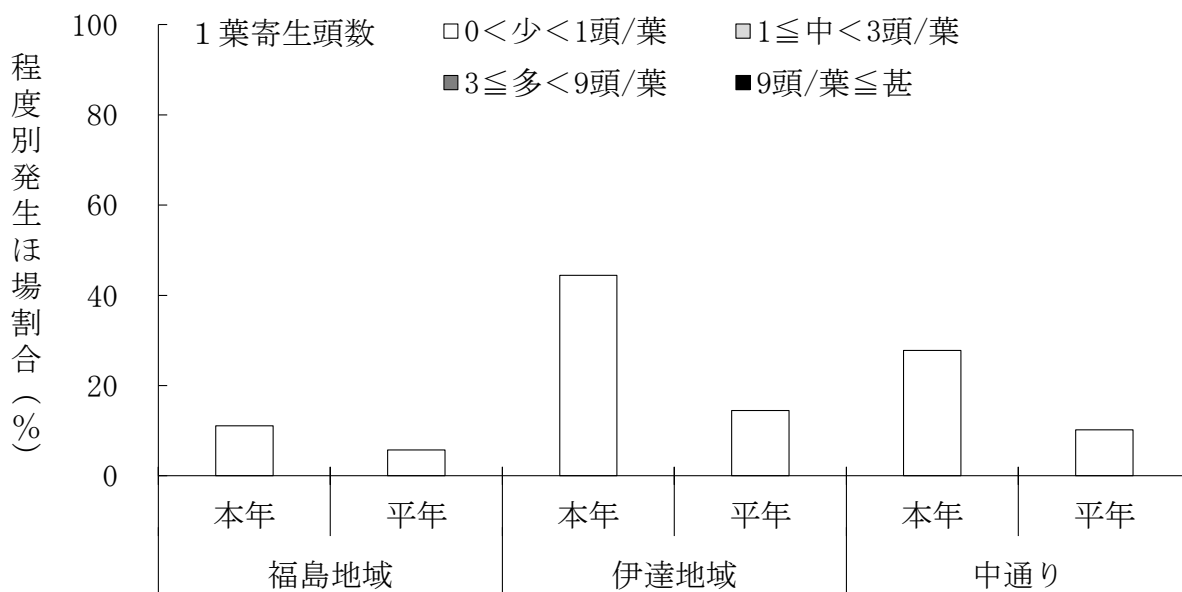


図10 モモハモグリガによる新梢葉の被害状況 (6月中旬)

(6) ハダニ類

新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況でした(図11)。

要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施しましょう。

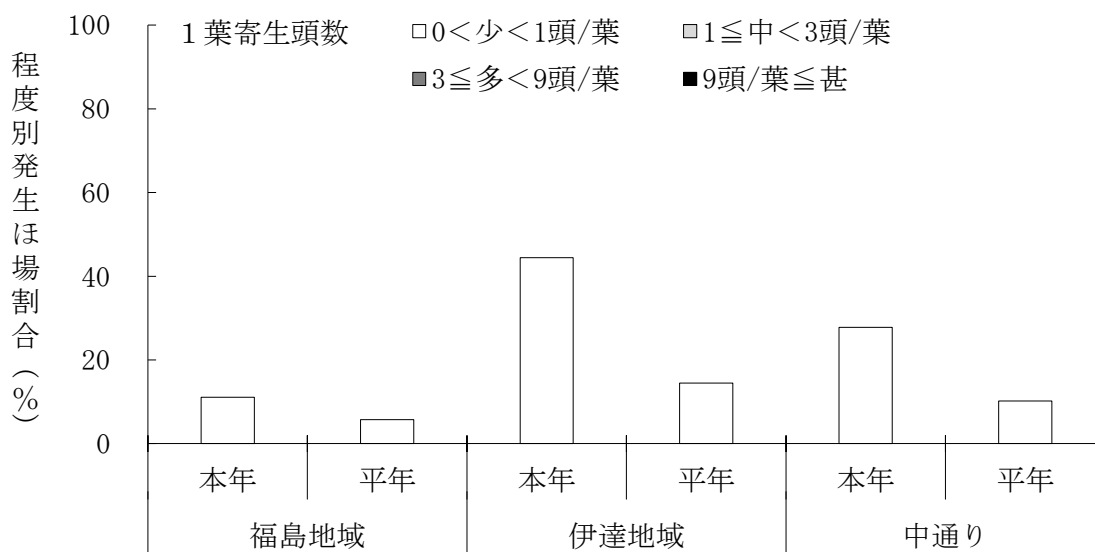


図11 ハダニ類の新梢葉寄生状況 (6月中旬)

(7) ナシヒメシンクイ

本種による7月上旬のモモ新梢の芯折れ被害の発生ほ場割合は、福島地域は平年よりやや低く、伊達地域では平年より高い状況でした（図12）。また、中発生のは場やこの時期に確認されていない「多」発生のは場が見つっています。本種第2世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、7月3半旬頃と予測され、第3世代幼虫の防除適期は7月4半旬頃と推定されています（農業総合センター果樹研究所、6月30日現在）。

近隣のモモやウメ等の芯折れの発生状況に注意し、県農作物病虫害防除指針や地域の防除暦を参考に、農薬使用基準を遵守し、防除を徹底しましょう。

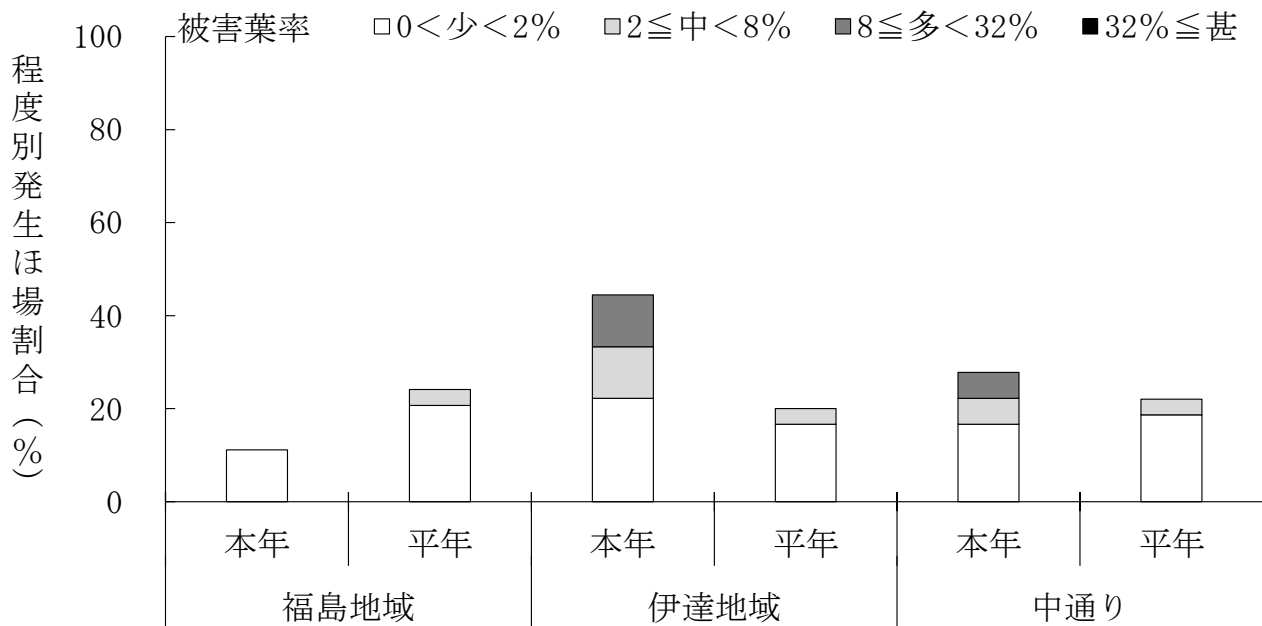


図12 ナシヒメシンクイによる新梢の被害状況（7月上旬）

3 ナシ病害虫の発生状況（6月中旬） 調査地点：中通り 19 園地、浜通り 10 園地

（1）ナシ黒星病

発生ほ場割合は、新梢葉、果実ともに平年並でした（図 13、図 14）。子のう胞子の飛散ピークの時期は過ぎていますが、すでに葉や果実への一次感染が確認されていますので、果そう基部病斑の発生と併せて、ほ場での発生状況に注意し、発病した果そう基部・葉・果実は、見つけしだい除去し適切に処分しましょう。

梅雨期に「幸水」果実への感染を防ぐ効果が高い薬剤は、カナメフロアブル 4,000 倍、スクレアフロアブル 3,000 倍及びミギワ 20 フロアブル 4,000 倍です（県病害虫防除指針参照）。薬剤散布は、降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意しましょう。

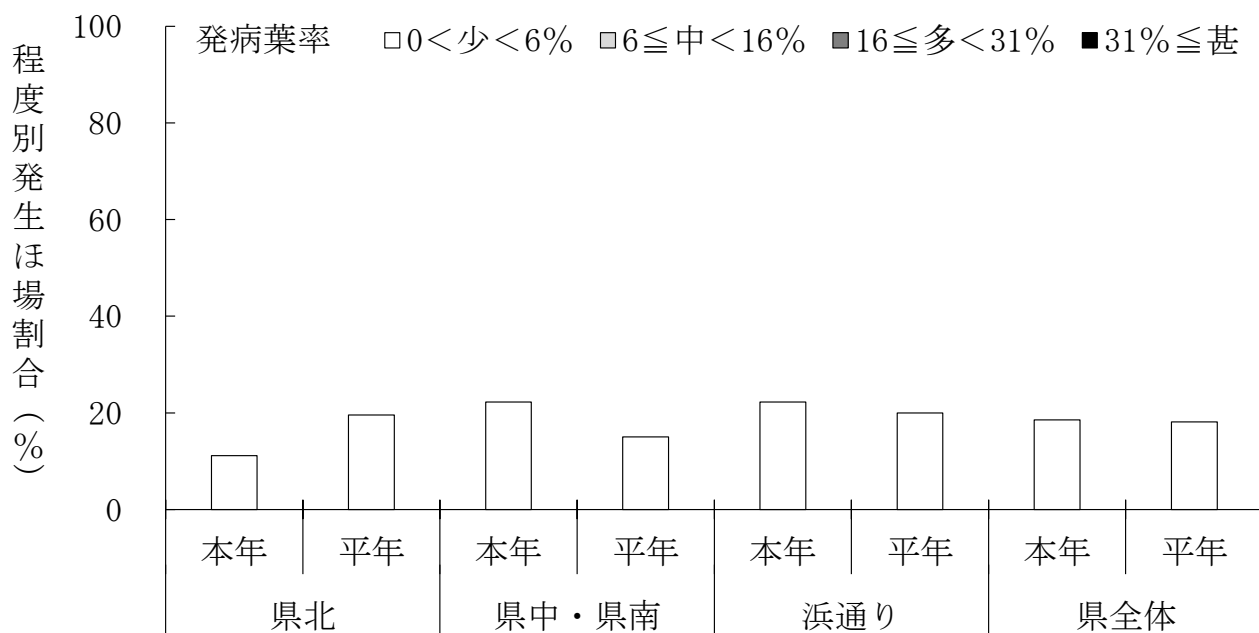


図 13 ナシ黒星病の新梢葉での発生状況（6月中旬）

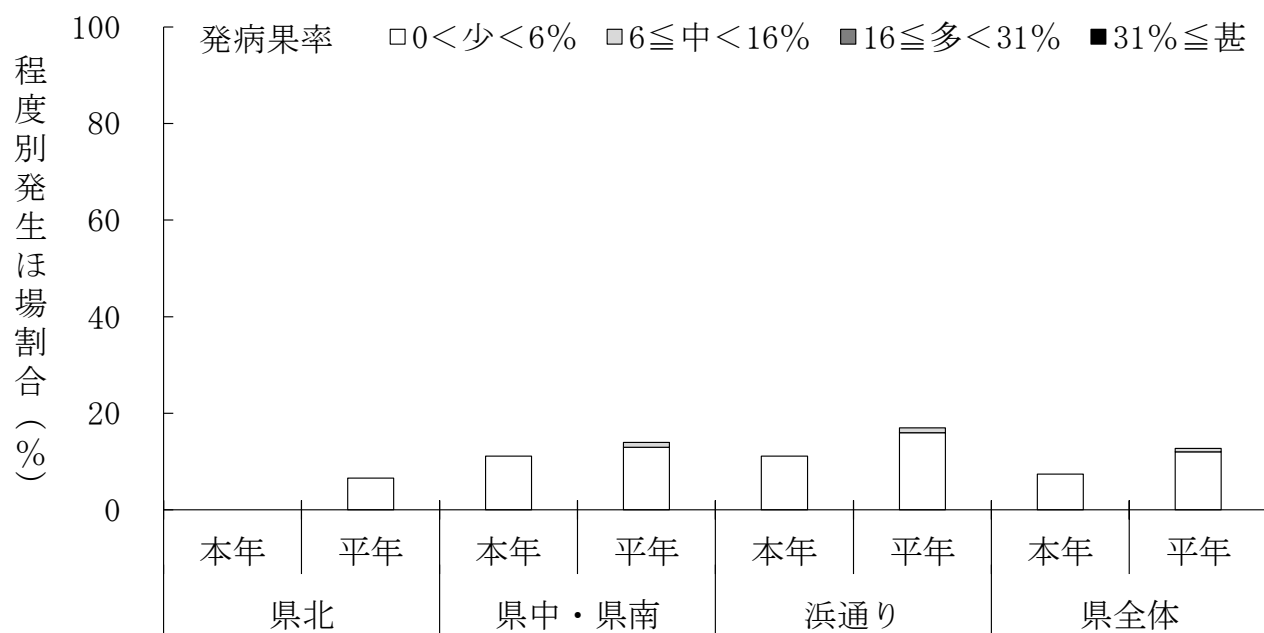


図 14 ナシ黒星病の果実での発生状況（6月中旬）

(2) アブラムシ類

新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや低かったが、浜通り地方では平年並であり、寄生程度が高いほ場があった（図 15）。

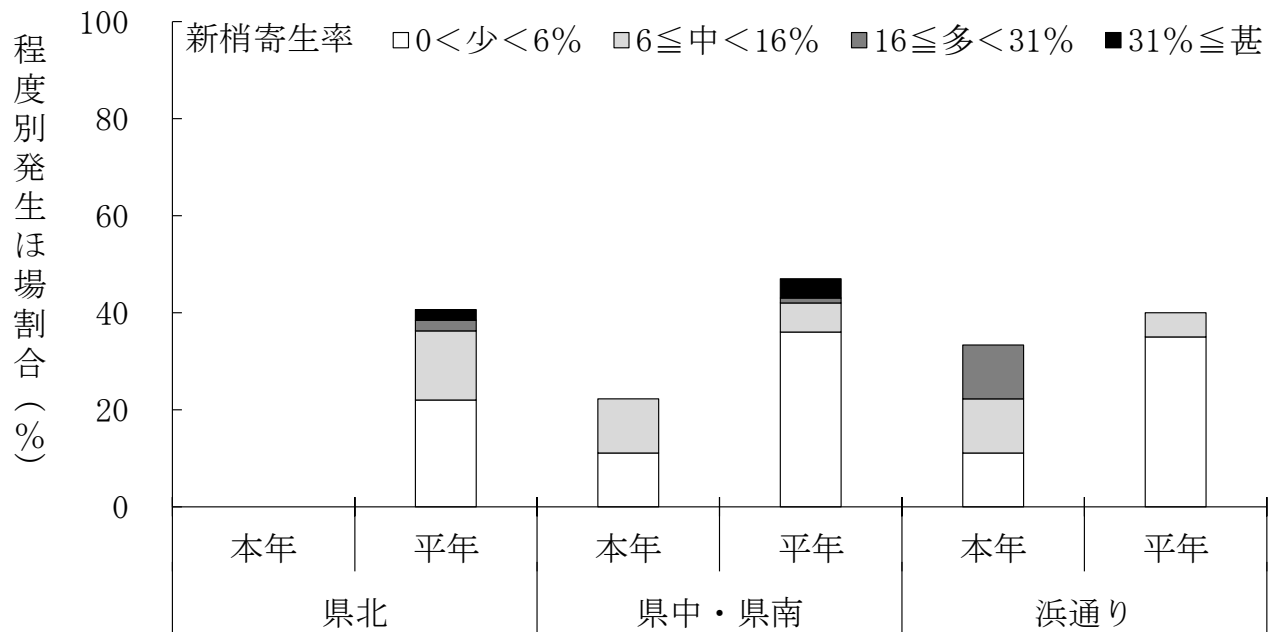


図 15 アブラムシ類の新梢葉寄生状況（6月中旬）

(3) ハダニ類

新梢葉での発生は、いずれの地区も確認されませんでした。要防除水準（1 葉当たり雌成虫 1 頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施しましょう（図 16）。

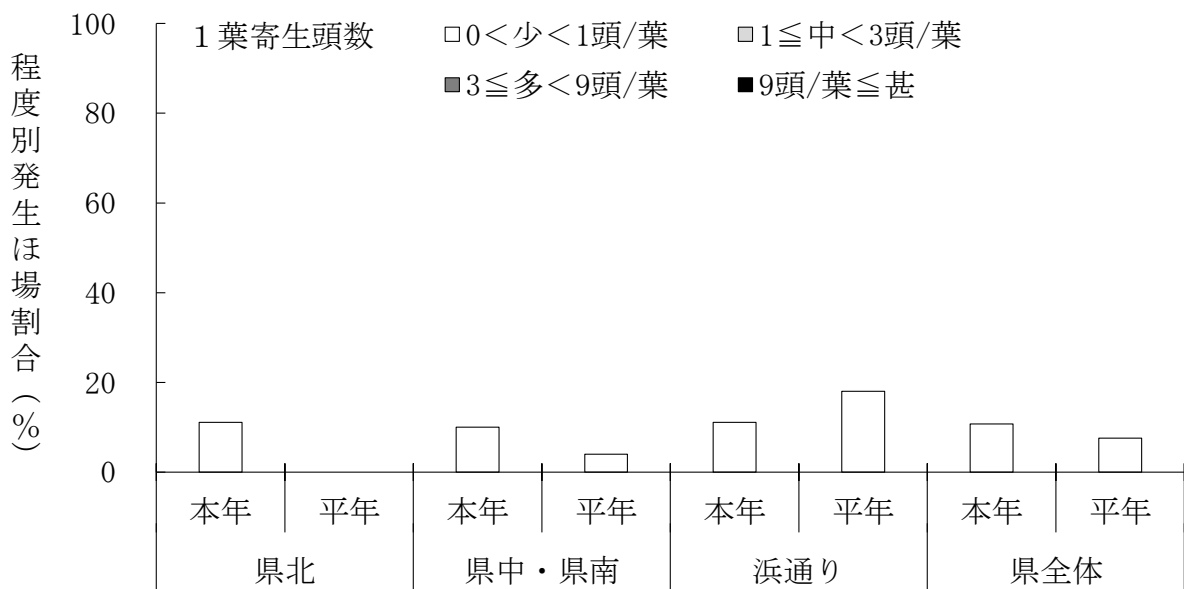


図 16 ハダニ類の新梢葉寄生状況（6月中旬）